



『幼児の教育』と私

素人編集者の思い出

赤間 峰子

『幼児の教育』がおめでたい一〇〇巻をお迎えの由、私はその中のどの辺りでうろうろしていたのか、と当時のもろもろが雑然と入っている段ボール箱を押し入れの中から引っ張り出しました。なつかしい物が詰まつていて思わず見たり、読んだり、時がたちました。

初めのうちは、前任の井上（旧姓、寺井）さんのなさることをただただ見ていて、こんなことが私に出来るのだろうかとだんだん心細くなりました。何しろ、最初にお話のあった時、私をよく知っている主人はすぐお断りしてこいと言い、私もそのつもりで幼稚園にうかがいました。それが、津守先生とお話ししているうちに何となく、「やつてみます」とお返事してしまったのは今もつて不思議です。もちろん帰宅してから主人に



は大変怒られました。初対面の私を包み込むような津守先生はもちろん、私には保育実習科時代の恩師、周郷博先生が当園長先生でいらしたという甘えがあつたのかもしれません。

主人に逆らつてまで始めた仕事ですので、途中でやめるわけにはいかない、との最初の意気込みは、でもだんだんにめげてゆきました。実際の作業はフレーベル館の編集部のはしの机でしました。何も知らない私にフレーベル館の方達が呆れていらつしやるのが、鈍感な私にもさすがに分かりました。それなのに親切に一から教えて下さった方々に心からお礼を申し上げます。もちろん、ご結婚を間近に控えていらした井上さんはどんなにご心配だったこととお察ししお礼を申し上げます。

編集会議といういかめしい話し合いも、津守、本田両先生のソフトムードに支えられてだんだん私も恐る恐る発言できるようになりました。人と人の出会いということを考えて、原稿依頼は出来るかぎり手書きに致しました。それを珍しいと喜んで下さった方もありました。反対に心ない言葉にお叱りも受けました。失敗のほうが多い四年間でしたがいつもそれをカバーして下さる方がありました。

周郷先生をかこむ座談会、対談はとても印象に残っているものがたくさんあります。薄暗い園長室で楽しそうに話し合われた串田孫一さんとのお話は詩情あふれるものでしたし、釜が崎の家庭保育の家でよちよち歩きまわる子ども達、それを追いかける保母さん達のなかでエリザベス・ストロームさんと、日本人とドイツ人の様々な考え方の違いを



熱っぽく語られた二時間あまり、日帰りで大阪へ行つた時のことなどついこの間のこと
のようにおもいだされます。私はその後主人が逝き、受洗した教会がルーテル教会で
あつたため、何回かストロームさんにお目にかかるつているのも不思議なご縁です。

現在、幼稚園の園長先生になられた服部公一先生との対談の時は赤坂の服部さんのマ
ンションに夜、お伺いしました。周郷先生は音楽、ことにバッハがお好きでご自分もオ
ルガンをひかれました。お二人のお話も尽きることなく、服部先生は私が主人に怒られ
ないかと心配してくださいました。作曲家から園長先生になられた時、とてもお懐かし
く、お便りを差し上げたところ先生もそのことを覚えているとお返事を頂きました。

故人となられた浅野順一先生は、周郷先生の信仰の父ともいえる方でしたが「クリス
マスの時、渋谷を歩いていたらきれいな賛美歌の歌声が聞こえて來たの。思わず扉をあ
けて入つた所が浅野先生の教会だったの」と遠い昔を思い出しながら、とつとつと話さ
れた先生のお顔は、はつきりと私の瞼の奥に残っています。

津守先生は、お時間がおありの時はよく幼稚園の子どもの中にいらしてじつと子ども
を觀察していらっしゃいました。そして私が驚いたのはご自分のお子さんの場合も同じ
で、お子さんがたの可愛らしい絵はもちろんたくさん記録を残していくつしやいま
す。当時の娘たちは、高校、中学在学中でしたが、私の手元には彼女達の幼い頃の記
憶としては写真しかありませんでした。つくづく娘達に申し訳なかつたなと思いま
した。



本田先生からはたくさんの中話をとの出会いを与えて頂きました。中話も絵本も子どもだけのもの、という旧い考え方根本から変えて下さった先生は、つい先日お茶の水女子大学の学長になられ、『お茶大で初の女性学長誕生』との報道に、文部省もたまには良いことをするのだなあと思いました。新聞にのった写真の先生は、昔より少しふつくらとされ、昔と同じように上品な笑顔で、お懐かしさで一杯になりました。

そのころ、ラジオで初めて滋賀県にある止揚学園という重度の心身障害者のための施設の園長、福井達雨先生のお話を聞き、多分『児童の教育』と関わってそんなにたつていない頃だったと思いますが、それまで味わったことのない、暖かい感動を受けました。すぐに編集会議にかけて執筆をお願いしました。思いがけず福井先生はすぐにお受け下さり、しばらく連載までして下さいました。思い立つたらばすぐに行動に移す（あまり深く考えずに）私は、多分五〇周年だったと思いますがお招きを頂いてとんで行きました。その時握手をして下さった先生の大きな手の暖かかったこと、いまだに忘れません。そしてずっと年末にはささやかな献金をおささげしています。そのたびに奥様が先生や園生の方達の様子をお知らせ下さいます。

この福井先生ばかりでなく、この仕事をさせていただいたおかげで、私の世界は限りなくひろがつて今に続いていることを改めて思います。

お世話をになりました多くの方々の中には、周郷先生をはじめ帰天された方もいらっしゃいます。ご冥福を祈るとともに、貴誌のますますのご発展をお祈りいたします。